

『あめの帰るところ』

著:朝丘 戾。

iii:テクノサマタ

先生に会ったのは、俺が高校三年生に進級してすぐの春だった。受験生になって、母さんに“塾へ通え”と叱られて渋々通い始めた、近所の小さな予備校の講師が彼だ。

俺はマンツーマン授業を希望したから、週三日一時間を先生と過ごすことになった。

町外れの五階建てビルの最上階にある予備校で、受付のおばさんが案内してくれた教室は、長方形の机とふたり掛けの長椅子がぎゅっと占領している狭い個室。遼(しゅん)巡(じゅん)したのち左端に遠慮がちに腰掛けると、正面にはホワイトボード。その左手前にパイプ椅子がひとつ。

習い事は小学生の頃に通っていたそろばん塾しか経験のない俺は、ドアを眺めながらそわそわしていた。……予備校の先生ってどんなだろう。

窓のない教室は、息苦しい閉塞感と独特の埃臭さが重たく漂って俺を圧迫し、心臓が生温かい掌で握り絞られるみたいに萎(しぼ)んで、“学力を晒(さら)した途端、呆れられるんじゃないかな”って、気弱な思考まで湧き上がらせる。

そしてチャイムとともにやって来た先生は、パイプ椅子へ直行して俺に右半身を向け、どかっと腰掛けると目をずっと鋭く細めて、ふー……と深く長い息を吐いた。

心臓が、緊張に跳ね上がった。

「は、はじめまして、こんばんはっ。椎(しい)本(もと)千歳(ちとせ)と言います。よろしく、お願いします……」

ハンサムな先生だ……ってほうけた。はっきりした二重、左目の下の泣きぼくろ、薄い唇、スラリとした長い脚。

でも先生は外見に拘(こだわ)らないのか、講師が着用を義務づけられている白衣は前がはだけて袖口がよれ、中の黒シャツもしわしわ。髪は寝ぐせ交じりにうねっていて、ジーパンの下はサンダルだ。手にはなにも持っていない。

で、第一声をあくびと一緒に短く発した。

「わからないことあったら訊(き)いて」

——え。

「あ、あの、先生……テキストのなんページを開きなさいとか、指示しないんですか？」

「しないよ。勉強は自分でわからないところをやった方が効率いいでしょ。不得意な箇所なんて、自分しかわからないんだから」

「えっ。じゅ、授業はどうやってするんですかっ？」

「解けない問題があれば貴方が訊く。俺が教える。それを繰り返すのが授業」

「それじゃ、ほとんど、自習と変わらな……、」

「うんうん、そう。毎時間、自由に自主的に勉強してね。俺はなにも言わないから」

えええええ……！ なにも言わない？ 先生なのに……!?

俺の顔すら見ない先生は、シャツの胸ポケットに入れていた眼鏡を出して耳にかけると、両手を白衣のポケットにしまっけて椅子にぐったりもたれ、両脚を伸ばしてまたあく

びする。

「この、予備校は……マンツーマンだと、自習スタイルが決まりなんですか……？」

「いや、俺だけじゃないかなー」

「そ、そんな授業で、ちゃんと、成績よくなりますか？」

「それは貴方次第でしょ。大学に行きたいなら、自分で努力しなさい。たとえ落ちても受験するのは貴方なんだから、俺や予備校のせいじゃない。全部自己責任です」

びっくりするぐらい正論だけど納得いくはずもなく、目の前で瞼(まぶた)を半分閉じて床へ視線を下げ、そのまま寝入ってしまいそうな先生を啞然と見返した。

「……じ、自己紹介も、しないんですか」

「“先生”って呼んでるじゃない」

「そう、ですけど……」

「俺、生徒の名前憶えないから」

「なっ。よ、呼ぶ時はどうするんですか!？」

「服の色とか、髪型の特徴で呼ぶよ」

徹底してる……。でもだめだ。こんなの、先生として全然だめだっ。

「先生は、ふ、不真面目です！」

「よく言われる。なんでだろうね」

「こ、講師に向いてなさすぎです！」

「頭はいいよ」

「うわあもう、自分で言うしっ」

ぷっ、と吹き出して楽しそうにふにゃふにゃ笑い、前髪を搔(か)き上げる先生。勇気を振り絞(しぼ)っての必死の説得もあっさり蹴散(きり)られ、心が動揺(どうご)と当惑(どうご)と呆れ(だま)れでくしゃくしゃになった。

「そんなことじゃいけないです。先生は教育者として全然お手本にならないです！」

「それは学校の先生の仕事であって、予備校講師は生徒に知識を提供すればいいだけでしょ」

「提供すればいいだけなんていい加減な気持ちじゃ、先生だって仕事が楽しくないでしょ！」

敬語も忘れて怒鳴(なみ)ったら、先生はやっと俺を見返して目をくりと丸め、ほろとこぼした。

「……怒った。怒られた。俺のこと叱(し)った」

「叱(し)ったよ！」

「貴方は他人を叱(し)れる子なんだね」

「え」

「嬉しい。……ありがとう」

今度(今度は)はいきなり感動した面持ちでお礼を言われ、顔がどかんと赤く破裂(はくはく)する。い、意味がわからない……と、逃げるように鞆(たもと)から数学のテキストを取り、どぎまぎ混乱したまま開いた。

なんだこの人なんだこの人、って感情が乱れて、問題なんかちっとも頭に入らない。

苛(いら)立(だ)ちとも羞(しゆう)恥(ち)ともつかない感情を持って余(あ)っていたら、先生は俺の顔を覗(のぞ)き込んでまじまじ見つめ、シャーペンを持つ手の甲(か)をつんつん突(つ)いてきた。

「……ね、どうして叱ったの？」

「し、叱りたくないけど叱ります、先生みたいな人はっ。他の生徒だって叱るでしょ？」

「“仕事を楽しめない”なんて叱ってくれた人はいなかったよ。不満ならすぐチェンジだし」

「ちえ、チェンジっ……か、哀しくないの？」

「哀しい？ 生徒は勉強方法が合う講師を選択しないとだめだよ。……ご両親の教育の賜(たまもの)？ 貴方はなんだか、すごく優しくいい子のようです」

真剣に褒めるからまた顔が熱した。呆然と硬直していると、テキストを見遣った先生が「これ違うよ」と唐突に指摘して解き始める。簡潔な表現で端的に解き方と理由を説明してから疑問を崩していき、空白を一切残さない教え方。頭のよさは納得するより先に身に沁(し)みた。

微睡(まどろ)んだ瞳で口調だけ快活に、的確な答えを導く先生を観察する。……鼻から下が別人のような奇妙さだ。なんだろうこの、太刀打ち不可能と否応なく思い知らされる独特なオーラ。

飄(ひょう)々(ひょう)として不(ふ)躑(しつけ)で、冷徹な大人かと思えば、急に無(む)垢(く)な子どもみたいな顔をする。

「ちょっとシャーペン貸して」

言いながら、手に持っていたシャーペンを奪われた。

「先生、筆記用具ぐらい持ってくるべきです、先生なんだから」

「えー、貸してよ」

「貸してよ、じゃないです。生徒に甘える先生なんてだめだ」

「うん……そうか、わかりました。じゃあ明日買いに行きます」

素直に応じて小首を傾(かし)げ、屈託のない笑顔を浮かべる仕草にも、なぜか嫌味は感じない。

「塾長……みたいな、えらい人は、先生のこと怒らないんですか？」

「怒られないけど、マンツーマン授業しか担当させませんって念押しされてるよ」

「……。先生がもしうちの高校の先生だったら、生徒にぼこぼこにされてるよ。うち、ほか学校で気性の荒い生徒ばかりだから」

「うわこわい。いい子なのに不良の一味なの……？ 痛くしないでください」

「俺は不良じゃないよっ」

焦る俺の喚(わめ)きにほろんと顔を綻ばせて、先生は太陽みたいに笑った。

ふいにその笑顔が俺の緊張をするりと緩め、春の午後にさざ波を立てる海に似た、柔らかい安堵で満たしていった。

そうだ、この人は海だ、と思った。茫(ぼう)洋(よう)とした海の波は手で掻きまわそうが石を投げ入れようが止められず、紅(べに)緋(ひ)色(いろ)の太陽が沈みゆくのを待って憧憬に暮れるしかない。そんな感覚。

結局、無駄だと予感しつつも先生という奔放な波に抗(あらが)っているうちに、時は過ぎていった。

授業終了のチャイムとともに、ウーンと両腕を上げて伸びをした先生は、

「あー……終わった。月曜日ってほんと長いなあ……」

とごちてから、俺の右頬を「びよーん」と引っ張り、からから笑って帰ってしまった。

勉強道具を鞆に片づけて身体に斜めに向け、帰りしな受付で先生の名前を訊(たず)

ねた。

——能(の)登(と)匡(ただ)志(し)。

へんな人だと思った。でも自転車をこいで先生の名前を心の中で復唱していると、授業が始まる前まで抱いていた不安や焦燥が、いつの間にか霧散していたのに気がついた。

公園のライトに浮かぶ夜桜が心をわくわく騒がせる。思わず感動をくちにして微笑んだ。

「すごく、綺麗だ……」

本文 p12～19 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>